

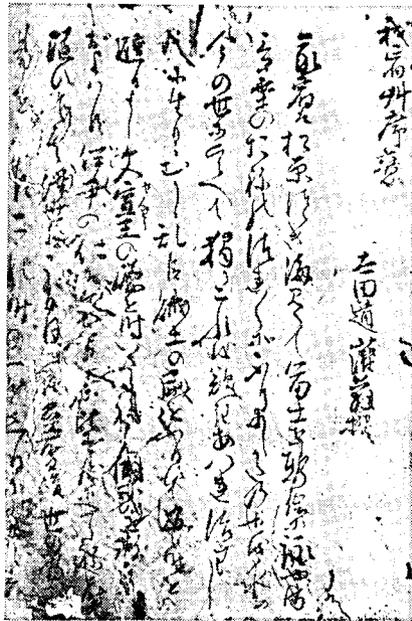
写本「我宿草序意」についての考察

桑野忠勝

一 本文

我宿草序意

太田道灌翁撰



我宿は松原つづき海見えて富士を軒端に詠やる言葉のたねのつれづれにふりにしかたの世を求め今の世にくらべて獨りこれを歎きあはれ治りし代に生るるむかし乱臣賊士の威をふるひて□し時をは避るよし文宣王の徳を時いたらわば國民を救におよはず伊尹の仁は文宣王に比するにたらねと時に隨ひて其澤世をうるはし□至聖後世の爲に易を□すこれ時の一をしるに有しも時を□□は愚のいたす處にや凡三綱五常のおしへ治世安民の謀聖人の□を本とす王位をふみ國を守る御身にして堯舜禹湯文武の徳を慕ひ攝政の身として周公旦の遺行を貴ひ夷齊の節杵臼程嬰か忠をも鏡とせんには過不及の誤あり臣上を犯し國を乱る罪少からず抑我朝の昔をつたへ聞に（改行）

天照太神遍く世を憐みたまふ事 茨不剪柴核削らぬ聖代にこえぬ四岳の民征を恨世を求るにたらず恩澤萬歳にあまつて神道をもつて王室の助とし萬機の政たしかりしに聖徳太子初て靈瑞の法を尊み賢臣守屋の大臣を殺されしより弘法世に弘まり次第に王室衰微して鳥羽白川の二帝にいたつてつゝに武家のために代をうははれ給ひぬ卑

夫闢才のと彼佛法を尊むにたらすとしり得へきに何ぞ王位をふみたまひ尊崇したまふまのあたりに伊勢の僧を避け見れば仏法不善なる事をしらすらん然に源の頼朝天下を治めてより武家相續き世をとる北条泰時才違し僧院を廢し書をよんで求めざるに功を得道徳の一端をしり少しく道に叶ひければ國家よく治りしに高時か世におよんで徳衰へ悪盛んにして家亡ふ後醍醐帝民を恵みたまふの義兵ならねは尊氏に世を奪れたまひぬ尊氏世を治る器あらねは逆賊ちまたにみち闘論やむことなしされ共其餘髪は後につたはりいまたいたり斯のことしそのかみ高師直か家人躡躡して隨遁の儀法を論し一墨の誓となしつれ／＼草と名附霖雨の後に是を見るに其意微にして君子の度にあらねとも其心の習に優美也たま／＼いとまの日其体にならひて思ひ出るに寸陰惜むは聖賢の道なれば及ふへきにあらすいたつらに寝て一生終らんより世の怨敵とならざらんことを□□□□ぬらし(改行)
天開け地はしまり人生す三つの物は陰陽の凝るの形氣の守る處也天の氣を神と言地の氣を鬼と言上有は陽にして君也下にあるは陰にして臣なり上明かにして下正しきを慈といふいにしへ日本の大法は皆神道也正しく直く身心治り□□□□天地の氣質を受たる人なれば天地□□□□を守らすんはあるへからす(改行)

天照太神の万民を教給ふに人は天地の靈也靜謐なるをよしとす目に不浄を見て心に見され耳に不浄を聴て心にきかされ鼻に不浄を嗅て心に嗅され口に不浄を言てこゝろに觸されと宣ふは誠に本心の徳をおさめよとの制教也君をして万民を憐み政道正しくする□□□□臣をして靈をみかくときは上を敬ひ義を重んじ親に孝をなさず人のうれいをかへり見ず道を廢するといふ靈忽にこれをばつする也人の悪む所のものは□□也死も道理によつてにくまざるは君子の道なり夷齊時を得ず餓て死行正成時を見て討死するは道理也君臣父子夫婦兄弟朋友の交り正しきを人とす交り乱るゝを禽獸とす君に仕ふるに禮節を守りて忠を尽し子父に仕ふるに孝を尽し婦夫に仕ふるに節を守り兄弟に仕ふるに敬をなし朋友に交るに信をもつてすへし君臣をは恩を厚くし勞をいとひ父子を憐むに道をおしへ兄弟を愛するに慈を以てすへし鸚鵡よく言とも飛鳥をはなれず狸犬よくものいへとも獸を放れず人として禮なくは禽獸の心ならずや(改行)
天照大神の大制に五賊の神安寧にして天地の神も同体也天地同体にして万物の靈□□如也只寝てもさめても三綱五常の道に心□□□其道に背く事をおそるへきに心かけれすしておのつから神明に通るとの大□□□國に居ては其國の大夫をも譏るへからす風□□しるへき也東夷西戎南蠻北狄風俗一□たるは人皆知る所也其國を守ものは其國の靈也其國に居てたつとまさるは非也日本に産るゝもの神道のかたはらをも知るへき事也(改行)
日本の和歌はあはれをしるのはしめならずやおろかなる人の恐るゝは狐狸と盗人なりされとも唯恐處はその倭姦の人愚智にしていま佛法を案するに釋迦といふは西方の聖人とふるき人も記し置れ此道の教はあるへきにあらすされは文字三写を経てからは烏焉馬となるか如しその道を失ふいまの佛法は皆非法となれり釋迦のおしへは身をすてて獨り心を安んずるに有人の勞をいとふに有數心を放るゝにあり然に幼稚の童老に諄たる尼法師をたぶらかし飢餓に賤家の糧錢をとりあつむる盜賊のみちまたにみち國邦の□あるひは又富貴の人を誣ては亂民の賊なり北條泰時執權のとき一人の僧泰時に言けるは公もし善心あらはひとつの伽藍を建立したまへと言泰時建立する事安かりなん其徳いかなることによと問僧曰一字の塔又伽藍こんりうし

ぬれは治世安民後生善所子孫繁昌の功德ありと泰時はいく仏法と神道と聖法はいづれ勝劣ある僧の言神道聖道は仏法におよひかたしと泰時笑ふて一師らふして万弟道に迷ふとは斯のことくなるへし日本宗廟太神宮は小社を草莽として作らせたまへとも御恵みば秋津洲のうちに通せり和僧のころこそたゞしからね功の大小によらず善縁ありと勸れはよかるへきわれと賺して伽藍をたてよといふは大にひかめり伽藍を建立せは其費大なるへし國の煩ひたるへしこれ安民の便ならず民のくるしみなるへし現世安民とは何事そや世をおさめ眷属をはぐむより外なし我子孫善人ならはいらすとも榮へ悪人ならはいのるとも亡ぶへしわれ家業たにかなへる事かたし況我道ならぬ事おや聖賢の法神道の意味深長なる事をいかてかり尽すへき一天のあかし万乗の君も渴仰したまへる仏法なればあしき事はあらし和僧鎌倉にあらは政の妖とも成へし彦智の徒の平職をうしなふ蝶にも成へしとて鎌倉を迫出したたり其後僧恐れて人をたふらかさず頼朝か建長寺といふてらを建しより鎌倉中に五山とて大きな寺ともあまた作り其外國分寺を作事数しらす國室大きにつるへ國賊街に満てり尊氏は夢想國師のたふらかされ天龍寺を建立し武將の身にてかゝる疎きに迷ひ民を救ふ事かたし(改行)

昔藤原朝の宿へ正成を赤松圓心隨へ行たり藤原出たまひ四方山の物語して居たまふ所に文觀法師出来れり君の恵みに飽ける法師なれば矛を持たせ馬をひかせおひたゞしきさまも藤原文觀にむかひ悪僧とのゝ訪ひよしなしとありければ文觀顔色かわつて悪僧とはいかなるや邪見放逸の僧をこそ言へけれと言ければ藤原智有人にてたわむれに言給し朝廷の臣につらなれとも臣の道を行ひ得されは良臣にあらず和僧も仏のおしへを行ひ給はねは直の僧にあらず善ならぬ悪心

ならぬは偽也和僧は悪僧我は賊臣也と言たまへは文觀言葉なくて痛りぬ圓心はつくく聞居て文觀は寵僧なるをさかしらに宜ふものかなと言ければ正成いやとよ是は戲なからたつとき事にこそ折なくてはかゝる事を聞んとさゞやきければ藤原開給ひて正成の賢にて我短を費まるゝこそ憚多けれ圓心のさかしらと言とはよしなるへし圓心さはかりの戦功あれとも其賞すくなき和人の不幸を思ひ上を恨むる意を捨るへし正成の宏才も時にあはされば益なし悪僧なれとも文觀等の時を得て富り不義にして富るは夫子の惡む所也我も人も會して善行を求むる事こそあらまほしけれと申され臣として義のため節を守る教こそたふとけれ百年の齡ひを保ちてわつかに三万六千日一旦の榮耀は浮へる雲のことし何ぞ是に就て義名をおとし君にむかつて怨をふくまんと語り給ひし正成聞て偏に圓心の憤あらん事を知給いて君の為に宜ふにこそとふかく感しけり圓心は何事も聞しらす長て居ける(改行)

藤原卿(改行)

けふまでも有ればあるかの身をもちて
夢の中にも夢を見るかな

といふ古歌を以し涙くみ給いければ正成偕は世を永く思ひ給はぬにこそとそゝる涙を流し帰りぬると也(改行)

今の世の人徳といへは欲の事と思ひ財室を集るを徳と思へり大きに相違せり正成が宿所に新田義貞足利直義名和長年會して古人の合戦を評す義貞のいはく軍を得しは義経なるへし正成はいはく義経は戦を得て謀をしらず敵をしつて味方をしらず長年いはく木曾か軍はいかに正成曰義仲は謀をしり軍を得たり大将の器あつて慮あり惜ひかな一字を書かず一文を読まされは善惡の道理をしらず直義曰木曾軍

を得たりとはいかに義経に手もろく討れぬるものと正成曰軍の勝負に依て善惡の弁するにあらざ漢楚七十数度の合戦に高祖度毎に利を失ひ韓信張良か謀拙くにはあらずとよきの至らざるも木曾が義経に討れたるは極惡を罪するときはなれはいくさの拙きにあらずと義貞が曰慮ある木曾極惡有事いかに正成曰慮は學ていたるにあらず生れ得たる所也聖賢のおしへを以て道理を行へば慮善と成盜賊の人のものを奪ふて希代の謀をなすを見給へ木曾も道理をしらざる故其慮惡と成関白とならんと言しとき覺明か言は大職冠の末なつて成給わすとこそゆへ是を用ひ夷心にもならぬ事は□ふらざるはやさしき心也君をなやます逆心として惡の行としりたらんには惡行はすまし士の色にふけるは恥としりて最期の軍に巴をかへすもあはれ也義経は木曾よりけなかに器量おとりぬへし木曾無学なれと專を守る心有義経は兵書を読しかとも守心なし長年がいはいく木曾大將の器ありとはいかに正成曰謀と軍とを得たるは大將の器にあらずやと語義貞以下是を感しけりとなり(改行)

正成渡川にて正行に一卷の書を殘す池田某傳へて重宝と云す其書に異朝には孝子忠臣の聞へ教しらすされとも文に心を寄すしてはこれをするとかたし今扶桑戰國と成て貴賤やすきいとまあらざれば文を學ふことかたかるへし日本にも孝子忠臣あり近き世に其人を慕いて親に孝をなさんに小松殿を學ふへし君に忠をなす事は藤房卿をまなふへし正成常に小松殿を貴まれしとかや高野師直の奢侈をうらやむもの多し終に命を路頭に捨彼玄宗の貴妃も安録山と通し天竺の乱はありしそかし異國本朝共に色にはふけらましき事也(改行)

義経衣川にて討れ為朝大嶋にて討れしとはいつわり也為朝はうるまへ渡義経は蝦夷へ落し事明らかし(改行)

或人本朝の人と異國の人といつれか勇強からんと異國は文を以國をおさむれば人智をみかき本朝は武を以國を治むる才をみかきこころ強なり謀淺くして節義をするもの希也異國とて善人のみにあらず本朝とて惡人のみにあらず勇の強弱をいはは本朝つよし夷のうち勇は韃靼つよし併本朝弘安年中元の世祖が代に日本を攻るとて大軍を渡行韃靼人也先陣十餘人肥前国平壺嶋に陣をとる九ヶ國の武士原田菊池等三萬餘騎押よせて合戦すだつたんの軍大にやふれぬればしりそいて陣を取菊池原田すゝんて攻るだつたん軍兵大きに恐れ地にふして呼喚せしを壺人も殘らず生捕これに誅す與萬戸子問莫青と言もの僅三人本國へたすけ返すことを以て思ふに日本の勇威格別也(改行)東鑑に頼朝與州の秀衡子泰衡圍衡を討んと評議しける時泰衡か家人丈間三郎と言ふもの小山判官朝政にゆかり有て密に通しけるは重賞あらは泰衡をうつて鎌倉に參らせんと言朝政彼は人非人なり同意するは恥也され共隱すへきにあらすと頼朝にうつたう頼朝いわく我計ひ取すへしと泰衡か方へ□分の家人かゝる密計ありと言しらせければ丈間聞てにげ失ぬ泰衡はしめ從類あやしみ是より破れとなり正成評して頼朝大將の徳あり朝政臣下の義あり泰衡不義の者なりし爰に

評して愚將の器あきらけし(改行)

上杉刑部太補憲春滿氏に此道を諫し一卷の書に貴賤別たす恥をしらざるは人にあらず源の義経名高き人なれ共道疎ければ物の理をしらす恥をしらす大義を思ひ立與州へ下るにたのめる商人の財宝を取らんとて盜賊共多入たるに義経か居ながら防かざるを恥と思ひ身命を捨て防き天下に義兵を上んと志しあるもの大私の小事に恥と思ひ身をすてける恥ならずや義経又身を捨てて名のためにすといへりゆみの弱きを敵にしらるゝ大きな恥と思ふや大將として謀かし

こく國を治るを良將とす色をおもんし政に憊り匹夫の勇を為すを悪將とす是大なる恥未代の嘲りを招く媒なり人の重んずるは命なり時と義をしらすして死するは恥なり是をしらざるは人の道にあらず義經恥のため名のため命をかるんじける恥也無学の人も語はよくして行ひあしきこと多也言を以て人を捨てず人をもつて言を捨ざるは聖教なれ共人の善言を聞其いふ人の短を譏る非ならずや正成か智謀に義經義仲の計略比すへきに土中の金玉悪人の善を捨さるいわれ也義仲義經謀敵可なる處は正成も用ひたり不義を見つみつからなむ聖賢なるにおのれをしらす人を譏るは拙きにあらすや(改行)

或人家畜一族も多かりしに大なる佛像を作り家財を費す家臣これを諷む其人の言仏を造るは善心ならずや造るとも我財寶尽るにあらず汝はいにしへの守屋なりとていさめしものを追放し思ひのまゝに仏をつくり寺を建立し一族か是をよしとして家財を費しける是を見てまつしきものは衣服をうつて僧にあたふ聖世もしつかなれば兵具の用を忘れ鈍鈍く刃しらめとも智者ゝ事なし然に將軍義教持氏と牙盾出来し彼ねちけんも遁るゝ處なく戰場に出しか盾には仏經を書たる衣を着せりかゝる愚人なれば謀敵の道をしるへき千葉の介氏嵐合戦して散々に討負沼に墮入れれば経書たる衣は泥に染みて文字も見へず建たる寺へ遁来たり一族百餘人いがか騒動す住僧出て言輪廻は車の輪のごとし今の有様これ過去業障の果る處なれば遁れ給ふへきにあらす一心に仏を念し自害有へし後世を再ひまいらせんと言與にもとてみな自害しける住僧そのかはねを溝瀆にすて物具をことくくはき取たるは浅ましき事にあらすや死せふといへはたやすく死する心なれば道たる教を聞なばいかなる節義も守るへきに偽僧の遺教を守死すへき所に死す骸の上まで恥をさらす今更此に論するにたら

す道を守もの希也(改行)

或人正成か義經を評して敵を知つて味方をしらす何そや梶原は能謀を得たりと義經は能戦を得たり梶原逆櫓を立んと言し事勇を失ふて言にはあらす義經是を無勇と云て憤を含めるは味方を知らざる也されと其軍に利を失はざるは能敵戦得たる故なるへし又問正成は梶原の逆櫓の謀ひとつを以梶原をはかるや逆櫓の謀いにしへも有しことなり藤原純友伊餘國にて謀叛を起し船に逆櫓を立て軍をよくすといへり梶原景時手勢五百騎夜をこめて生田の城に抑すを景時下知しけるは敵大軍なれば軍は定て急なるへし討たる敵の首切となる敵の笠印をとりて我笠印とせよ目印して味方討すなとて大勢の中へ攻入ぬ景時が軍兵とも笠印を取らざれば敵を討たる事明かならざるを恥て身命おします敵を討て笠印をとる初の程は敵味方分明也しか聖時移りければ景時が勢皆笠印をさしかへていつれを敵と見わけ難し景時勢に息をつかせんとてしつかに引けれども敵見外けむことなし嫡子源太が見へされは又取て歸し敵の中へ墮入れ共敵しかくと見しるるなし是等は謀を得たる徳なるへし一言を以て賢愚をしれば一計をもつて大略を知らんにこそやすけれ非義節義も分離し人を譏り人を嘲人を詔ひ人を妬たくひこそあしからめ善を善とし惡を惡とする褒貶なくは非なるへし東鑑に上総□□鎌倉にて□れしときに小山判官朝政問けるは一の谷の合戦源平雌雄を決したる軍源氏は僅四万平家は十万余騎要害に蔽らせ給ふ□合戦勢の多少によらず謀にあたり利有といへといかなる事に一日のうち敗れたたまへるや上総か言平家一類の内能登守教経を人勇謀有ければ一門をはしめ深き海たかき山と頼みぬ然に判官義経三章合戦にうちから丹波路より搦手へむかひたまふと聞へければ宗徒の人々大勢を相添て鴨越の方へ向

わんと戮したれと一門□路を木曾義仲に追落されて世に義仲に勝る
弓取あらじと思われしに義経木曾をたやすく討取駈向ひ給へはいよ
いよ恐れし義経に向ひ軍せんと言人なしいまは教経ならて頼むへき
人なしと壹万余騎相添て差向けらる教経三千余騎率て鶴越のふもと
に陣をとり七千余騎は舍兄越前の三位通盛に相添て後陣とす義経ひ
よとりこへを半落して凱歌す其聲山にひびき夥しこれを聞て人々あ
はや山の手の軍敗るれと□□さはく土肥の次郎か七千余騎たゝかい
疲れて見へしか是に力を得て攻戦ふ義経窟にかけ落さんとしたまへ
とも教経陣を堅ふして前に馬の駆場を残しひかへたるを見て左右な
く落したまはず其勢千計嶋傳いに弓手の方に向ふ教経見て大将義経
がさしずは東國に名を得たる武士なるへしとて後陣の通盛に敵こそ
御陣をめかけて嶋をつたひ懸ると見へたりされとも二手に別れて味
方の陣を乱さん為ならん敵かけ落さはむかいたまへさなくは陣を堅
ふしてひかへたまへと言おくる然處敵勢馬の鼻をならへかけ落さん
とす通盛これを見て山際^{きわ}にかけ向わる教経見て拙なき人の軍かな山
の根に居て何とて防きたまはんと言もはてぬに一千余騎の敵喚て落
行通盛さんゝに駈立らる敵はしかゝ戦得すしてかけつて爰かし
こ火をかけ能登殿を田代冠者が討たりとこゑゝ呼はるゆへ味方力
を失ふ宗盛はしつて能登との討れいかて叶ふへきとて船に乗らんと
落^{おち}に打出らるる教経少しも騒すひかへしか味方の軍敗ぬと見てとり
き人をもつて宗盛の方へ教経こそ手を碎て義経を討給ひつれ今は恐
るることなし追手搦手の敵ともみな討取て見参に入れんと聞へけれ
は軍兵とも大きに力を得て勇みけれども宗盛騒て耳にも入れず落ち
れしより追手搦毛一度に敗れたり教経は陣を堅ふしてひかへたりし
か軍兵とも味方敗北と見てさんゝになる義経二千余騎くつはみ

添へて墜落し給ふ教経も危くいかて叶ふへき□夫長沼十郎と言もの
教経と名乗りて討死す教経は其隙に落行多くの中を切ぬけ播磨の高
砂より船に乗入嶋に渡りぬと朝政きゝて聞しにまさる能登殿かなと
感せしと也(政行)

世におしき事は楠木正成と藤房と相談して朝廷の政のそむけるを諫
めむとて本朝の事を正成誓し異邦の事をは藤房誓したまひ二巻し給
ひたる書上杉家に傳はりしかいかなるものか盜けんいまはなし是は
天子より庶人に至る迄文武の備へなくは天子の世を治る事なく政行
ふことかたかるへし庶人は家を治ることなく身を保ことかたかるへ
し乱世は武を以治め文を以正しくするは聖賢の法也武をすて文を捨
るは手足をすてるかとし今の世にて文もなく武もなければ手足な
きに似たり心すへき事也(政行)

藤房のおしへる人として慎へきは鬪也天子はなを慎み給はずんば叶
ひかたし茅茨きらす柴椽けつらさるは聖代の度也四岳の民其澤に懷
て八音を遇密せしを聞給はずや武には爰を以軍法の本としければ仁
政の源とす然にいまははらく世しつかなるにまかせて民の勞をかへ
りみす大内眞道宮あらん□□なし孔子は周公の才あれと鬪あらは見
るにたらすとのおたまへり□て慎ませ給はんは鬪なるへしと宜へり正
成天子の位を失ひ給ふことは費をいとわせ給されは也天照大神の民
の勞を憐み物のつひへをいとわせ給ふ世人あまねくする處也君其御
末として何そ神の御政にたかはせ給ふへき費をしられは害の生る
事安し天子位を失ひ庶人家を失ひし源は皆奢侈也陰陽は四時の運ひ
を正しく万物を化生す天子は万機の政道直しく諸民養育したまふ常
なるへしむしか青砥左エ門と言ふもの一鏡を水中へ落し数多の鏡を
もつて是をあくるは一鏡を惜むにあらす永くすたる費を思ふに有い

まの世を是に比するに王道年久しく衰へし事沈し錢の如し頃日漸いしへにかへる錢の岸に浮ふに似たり此時あらたに此錢を揚すんは又水底に洗む事やすし今王道新にし給わすんはまたおとろふる事安かるへし君王道を興し給わん為に義兵を孥給へり爰におみて君のため死する者は是青砥左衛門が一錢の爲にせし数多の錢の如し道理明かなれば其死せる者を痛むにたらす然に長年の乱に民の勞せるをかへりみず大内裏以下に國寶を費されん事沈る錢を揚て後却て百錢を水底に投るとことならずとかや或時足利直義正成に對して古人の勇は匹夫も□□□其故は佐々木と梶原が宇治川の先陣熊谷平山の一の谷の先陣等用るにたらすこれ皆端武者の勇にして人を司る勇にあらずといふ正成が言ふ佐々木梶原と熊谷平山が勇を論したまふはおろかにこそ頼朝の勇を用ひ給はぬ彼四人の者いつれも百騎より下の者にあらず然に身命を惜まず太平に先たつて戦ふこと頼朝大将の器あつて能人を勇したまふゆえならずや今世の中頼朝のことく人をいさめる大将あらは□ふも皆々佐々木梶原かことき勇をすへし直義大に感し頼朝はいかなる事をもつて人をいさしましめるや正成か言頼朝は天下を奪し人也臣として此謀計を怙ふへからす直義恥て帰るとあり正成の心を思ふに禮をうるはさす也(改行)

誠に才智は天のあたふる處にて求め難し行ひ力はげみ学ふ時は誰か乱臣賊士に落んや(改行)

からぬ心の玉有なからみかきえさらぬ人そかなし哲家の□に心たに真の道にかなないなはいのらすとても神や守らんかゝる□こそ我人のかかみなすへきもの也

二 写本の成立と系譜について

日本文学大辞典に「我宿草^{やがやと} 随筆三卷一冊」として、次の記事が載せてある。

〔著者〕古来伝へて太田持資(道灌)の作として、本書刊本の巻頭にも「太田道灌翁撰」と掲げてあるが疑しい。〔別名〕太田道灌随筆「刊行」未詳。享和三年の跋がある。〔諸本〕刊本の外に数部の写本があつて、文句及び文段に多少の出入がある。中に「太田道灌随筆」と題した一部もある。これは武藏國在原郡大崎村安樂寺の所藏を林道春が閲してこの題名を付したものと云ふ。

〔解説〕卷一に天照大神の徳、我皇室の尊敵、仏法の害毒、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友の義等数条を取め、卷二卷三に互つて藤原藤房・楠木正成・赤松円心・僧文親の会談、又正成・新田義貞・足利直義・名和長年等の会談、正成常に平重盛を景仰した事、正成の源義経評、吾妻鏡の正本による八島の戦談、正成、藤房の会談、兩人の主張などを取め、最後に兼好と徒然草の短評を載せてある。畢竟治國の要道と史的人物の評論とを寓話的に述べたものと言へようが、書中の所説が事実に基づいたものとは思はれぬ。数面の挿図は俗受けのためであらう。享和三年浪遠佐學與齋の跋がある。與齋は上田秋成の事か。卷末に道灌の小伝及び後裔の記事が付録されてゐる。

以上が和田清(東大名哲教授文博)氏の日本文学大辞典の記事である。氏も上田本(この写本を仮りにそう称することにする)は御覧になつてはいないと思われるが、上田本は「刊本の外に数部の写本があつて」その中の一冊に加えられるものと考えられる。

結論をさきに述べると、上田本は写本としての成立も系譜も不明である。ただ本書について調査した二三の事柄と私の考察を付記す

ることにする。

上田本は、宮崎県小林市在住の旧家上田家から小林中学校（現
小林高等学校）へ、他の多くの漢籍と共に寄贈されたものである。
上田家の中で本書と直接關係を有する人として、上田集成（天保六
年十一月—大正九年十一月）が挙げられる。氏は、若い頃の名前
を「周造」といい、後に「集成」と改めている。氏は若くして学に志
し、鹿兒島（薩摩藩、この小林も薩摩藩であった）の平田某に師
事し、漢学を学ぶために故郷をあとにした、時に十五歳という。ま
た氏は書を好み、自らも「鶴陰」と号し、その作品が同家に多数伝
わっている。氏の筆跡・書風をみるに、若い頃のもの、江戸時代に
広く行なわれた御家流の系統のものであるが、晩年の書風には円熟
した平安朝の優美なものが如わっているように思われる。このよう
なことを背景にして考えれば本写本は鶴陰氏の手になったのではな
いかと思われる。しかし、文学大辞典に言うところの「俗受けのす
る」絵が、本書にも描かれているが、氏はけっして絵を書かなかっ
たということであり、なお疑問が残る。本書の表紙の裏にはられて
いる用紙の裏面に「李用雲筆」として、南画系統の下絵が描かれて
いる。本書の絵とは無關係に思われる。ともあれ、氏が、李用雲も
しくは他の者に本書の絵を依頼したかとも考えられるが、必ずしも
氏の書写したものと見る理由もないので、何らかの経路を辿って、
本書が氏の所有となったのであろうと考えるのが自然のようであ
る。結局目下のところ、先述の結論にかえらざるをえない。

本書には奥書が無いので書写年代も不明であるが、日比谷高校の
橋誠氏は江戸時代は降らないだろうと推定され、私も本書の古びぐ
あいなどから考えてそうかも知れないと思っただので、このことを付

記して稿を結ぶ。

十月二十八日稿

（山口県豊浦高等学校教諭）